

緑と潤いにあふれた「杜」の病院では 運用面も含めた感染対策にも配慮。



10F特別室のトイレ。壁掛けタイプの便器やはね上げ手すり、L型手すりを採用し、洗面カウンターも車いすで利用しやすいものに。ホテルのような快適空間に、さまざまな基本性能が備えられている。

2017年に、慶應義塾大学医学部は開設100周年を迎えました。これを記念する事業の一つの柱として2018年5月、慶應義塾大学病院の新病院棟である1号館（Ⅱ期）が、新宿区の信濃町キャンパス内にオープン。地上11階地下2階の免震構造の建物の低層部には外来や検査部門、高層部には病棟が配置されています。患者さんを優しく包むような「杜」のデザインの病院が、次の100年に向けてスタートしています。



緑豊かな神宮外苑や新宿御苑に囲まれた信濃町のキャンパスに、新たな1号館が誕生した。

臨床・研究・教育が一体となった 医療環境の構築をめざして。

1号館（新病院棟）は、既存のいくつかの棟の建て替えによって、2号館の北側に建設され、その低層部が連絡通路で結ばれました。この新病院棟を中核として、診療科の枠を越えた医療チームによる「患者さん中心のクラスター診療」「世界最先端の基礎臨床一体型医療体制の構築」「災害に強い都市型地域医療の推進」「医看薬の連携による世界を先導する医療人の育成」という4つの柱を持った事業計画を推進。臨床と研究と教育がすべて融合し一体となった医療の場の創造による、新しい慶應義塾大学病院をめざしています。今後は他棟などの改修を重ね、2020年までにはエントランスと外構まで含めた整備工事が完了する予定です。

病棟のトイレの特徴は、動線を短くしプライバシーにも配慮して、今までの集中型からセミ分散型のトイレレイアウトを変更。また、9Fの女性専用病棟では4床室ではなく3床室として、1床分のスペースに洗面コーナーを備えたトイレを設ける工夫も施しています。



10Fの特別室にはリビングのような設えの控室を併設している。

慶應義塾大学病院 1号館

- 竣工年月 / 2018年3月（Ⅱ期）
- 所在地 / 東京都新宿区信濃町35
- 施主 / 学校法人 慶應義塾
- 設計施工 / 株式会社竹中工務店
- 監理・監修 / 日揮株式会社
- サインデザイン / 有限会社エモーショナル・スペース・デザイン

- 延床面積 / 74,796㎡
- 病床数 / 798床



「KEIO FOREST」という病院のコンセプトを思わせる「杜」のようなやすらぎと癒しに包まれた特別室。

この場所に特有のコンセプトである「KEIO FOREST(慶應義塾の杜)」。

新たな1号館のコンセプトは「KEIO FOREST(慶應義塾の杜)」。周辺環境や既存建物との調和をはかり、緑あふれ、潤いある空間を創出しています。建物の内部も杜(もり)に優しく包まれているような、やすらぎや落ち着きを感じられるデザインになっています。

メインの通路である「メディカルストリート」と「ホスピタルモール」は、患者さんを各診療科へと導く大通りで、大きな樹の幹と枝のような関係。外来や病棟の壁面に描かれた木々のシルエットには、病院での時間を心穏やかに過ごしてほしいという想いと、迷わず目的地にたどり着くための工夫がなされています。これらの木々は、病院の周辺にある樹種を調べて、院内にもデザインとして取り入れたもの。木の葉や花、果実の色も壁の色などに反映させながら、「場所性」を感じることでできるオリジナルな医療環境が創造されています。



8F病棟フロアのラウンジ。案内パネルには病院の周辺環境と調和するように、東側には代々木公園のクヌギのモチーフが描かれている。



1Fカフェラウンジ「フォレスト」。奥行感のある杜の空間をイメージし、光の色を変化させ時間の移ろいを感じさせる光壁が美しい。



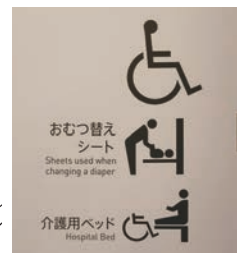
9Fの西側スタッフ廊下は、ヤマボウシのグリーン。東側スタッフ廊下は、桜のピンクをイメージして、エリアによる明確な色分けがなされている。



2F外来の女性用トイレの洗手器。モザイクタイルの美しさが心地よい空間である。



2F外来の男性用トイレには、防汚防臭陶板を採用。小便器にも清掃のしやすい壁掛けタイプを採用している。



分かりやすく表示された外来の多機能トイレのサイン。

voice 管財課の方からの声

都会の中にある緑の環境を大切にしました。



管財課 環境担当
課長
濱中義明さん

新しい病院でどのような意匠を望むか、教職員にアンケートを取り、イメージを組み立てました。信濃町は神宮の森や新宿御苑があり、都会の真ん中にある緑のベルト地帯。そこで「慶應の杜」というコンセプトを立て、緑豊かな木漏れ日のイメージの中で癒しやすらぎを感じてほしいと考えました。古い建物は順次解体し、新しくなった魅力ある環境の中で、最先端の医療を提供していきます。幼少の頃から80年以上この病院に通っているという方から「きれいになって本当によかったね」と声をかけていただいた時は感無量でした。

voice 設計担当の方からの声

いろいろな人の「つながり」を作る仕掛けがあります。



株式会社竹中工務店
東京本店 設計部 設計第3部門
設計4グループ長
齋藤俊一郎さん

このキャンパスでは、臨床の場と基礎医学研究の場を最短でつなげるために、低層階にメディカルストリートというキャンパスの主動線を設けて、各棟の縦動線を隣接させました。患者さんの外来の主動線「ホスピタルモール」と、スタッフ専用動線「スタッフモール」を確保し、それに沿って医師や看護師、その他すべてのスタッフが集まる共用スペースを設けて医看業の連携をはかり、学生用のスペースも確保して、医療人の育成も空間からサポートしています。



外来の多機能トイレは十分な広さを確保し、おむつ交換、衣類の着脱にも使用できる折りたたみシートなどを設けている。

乳児バスはオーバーフロー穴をなくし オーバーフロー槽にしたものを導入。

新生児病棟の沐浴室には、当プロジェクト関係者の要望を反映した、より高い衛生性を維持できる新しい形の乳児バスを導入しています。「当院ではかなり以前から乳児バスのオーバーフロー穴の汚れが気になってパテなどで塞ぎ、汚れたら交換を行っていました。そうした中で、近年いくつかの病院で起こったNICUなどにおける薬剤耐性菌によるアウトブレイクの際に、オーバーフロー穴の構造が問題になっていると知り、やはり穴を塞ぐか、もっと大きくして洗えるようにするしかないと考えていたので、良いものを作ってもらえたいと思います。また、当院では清掃用シャワーを設置し、沐浴槽を流水で洗浄できるようにしました(感染制御部 課長・高野八百子さん)」。

こうした感染管理の専門家の声から発した新しい乳児バスは、オーバーフロー穴をなくして沐浴槽と同様に洗えるオーバーフロー槽にした画期的な形状になっています。これによって、感染対策を施した安心できる沐浴環境が整えられています。



乳児バスが並ぶ沐浴室。



オーバーフロー穴をなくした乳児バス。オーバーフロー槽はしっかり洗える大きさがある。



乳児バスの横には、スタッフ用手洗器の水はねを防ぐパーティションを設けている。



4F精神科病棟の個室に、スペースを効率的に生かして設けられた洗面器。車いすでも使いやすい仕様である。



精神科病棟個室の、八角形のトイレ・シャワーユニット。万が一の事故を回避するために、シャワー金具の位置や手すりの形状に配慮している。



病棟の多床室の前には、4床室当たり1ヵ所の分散型のトイレが設けられている。



病棟の共用トイレでは、左勝手や右勝手を考慮。洗面カウンター付きのトイレも。



病棟の車いすトイレ。壁掛けタイプの便器やはね上げ手すり、L型手すりを採用している。



シャワー付きの個室。出入口が段差のないバリアフリー仕様になっている。

感染対策の配慮についてお話をうかがいました。

感染対策では手洗い環境とともに、運用面での取り組みも大切です。



感染制御部 課長
感染症看護専門看護師
高野八百子さん

4床に1つのトイレが目安。

日本は水が豊かな国ですが、トイレや洗面器などの環境は、以前はあまり整えられていなかったと思います。病院のトイレは遅ればせながら変わりつつあるという状況です。病院のトイレは一般的な公衆トイレと異なります。疾患や治療の影響などで、排泄も含めて体調が悪い、身支度を一人で調えられない、行動が緩慢にならざるを得ないといった状況の患者さんが使用する場所です。「次に使用する患者さんがトイレの外に並んでいる」という状況はあり得ません。薬剤耐性菌対策でも重要ポイントの一つです。患者さんの使用時間や排泄回数などを計算すると4床に1つのトイレが目安になります。ベッドからトイレまで、毎回リハビリするように遠い場所にしかないという状況も、排泄に問題を抱えることが多い患者さんにとっては過酷なものとなります。部屋の近くに、必要な数、必要な広さのトイレがあるというのが病院のトイレに求められる条件ではないでしょうか。



9Fスタッフステーションまわり 平面図

廊下などスタッフの動線上のよく見える位置に多くの手洗器を配置。

感染対策上、手洗いのできる環境がとにかく大切です。手洗器は大きく分けると、患者さん専用、医療従事者専用、共用の3種類とし、用途によって手洗器を選びました。医療従事者専用のは肘までしっかり洗えるタイプで、スタッフステーションに2台設置しました。病棟廊下はさまざまな職種スタッフの動線となります。2部屋に1つの手洗器を配置しました。通行するだけで手洗器を探すことなく、自然に視界に入って手洗いができます。また、すべての手洗器に、水はねで床や壁を汚さないように袖壁をつける、壁を凹ませるなどの工夫をしました。手からの水垂れで床を汚さないためにペーパータオルと液体石鹸の位置もすべて決めて統一しました。

すべてがアルコールでいいわけではない。流水による手洗いも必要。

速乾性手指消毒剤は、流水手洗いと比べると、手荒れしにくい、時間が短くて済む、水のないところでも使えるなど、手洗いに勝ると言われることもあります。でも流水手洗いは必要です。手洗器を初めから設置していなければ、後から追加できずに我慢せざるを得ない状況の施設も多いと思います。病棟ではアルコールが有効でない「目に見える体液や排泄物の汚染」やクロストリディオイデス・ディフィシルなどの細菌もありますから、しっかりと流水手洗いもできる環境を整えるべきだと思います。

トイレを使う人もきれいにする。一人ひとりの取り組みも大切。

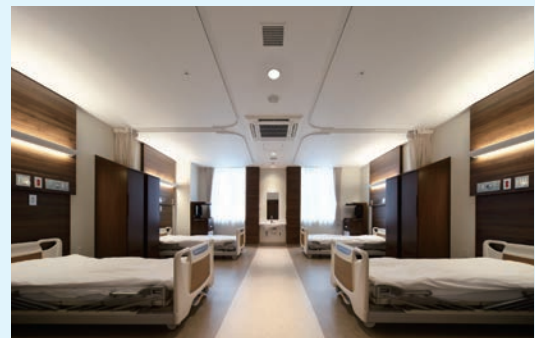
清掃スタッフによるトイレ清掃は当然実施することですが、汚れたら拭くという一人ひとりの習慣も大切です。家庭のように少人数の限定した家族だけで使用しているトイレではありません。先に述べたように体調の悪い、排泄に問題を抱えたような状況で使用するので、当然汚してしまうこともあるわけです。汚れたら拭くという習慣は自分の身を守ることに繋がります。使用前に便座、使用後に便座、手すりなどの汚染しやすい場所を備え付けのアルコールなどで拭きます。患者さんにもありますが、「汚れやすい」「汚れてはいけない」という認識になれば、患者さん自身ができない場合に看護師に伝えていただくことができると考えています。



スタッフステーションの出入口の2ヵ所には、肘までしっかりと洗える大型の手洗器を設けている。



廊下の要所に設置されている手洗器。スタッフと患者兼用であり、病棟の共通仕様となっている。



4床室には患者用の洗面器が、アプローチしやすい場所に設けられている。